

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月27日現在

機関番号：62501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720292

研究課題名（和文） 造瓦からみた6～8世紀の日朝交渉

研究課題名（英文） The Relationship between Japan and Korea in the 6～8th Century from Roof Tiles

研究代表者

高田 貴太（TAKATA Kanta）

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

研究者番号：60379815

研究成果の概要（和文）：、軒瓦の瓦当文様や製作技法を通して、6～8世紀代における日朝交渉の動態を考古学的に検討した。特に新羅との関係を重視し、具体的な事例に基づきつつ、その関係性を具体化した。その中で、朝鮮古代寺院の瓦資料を集成し、現地においてできる限り実物を観察、分析することで、その地域性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Roof tile materials in the 6～8th Century show that Japan and Korea had many exchanges through the 6～8th Century. Hence, it may be said that Silla had been occasionally searching for an affiliation with Japan in the conflicts among Three Kingdoms of Korea. It can be presumed that the exchange route with Silla was also one of key axes in the establishment and development of a state based on law and ordinance in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：瓦・日朝関係・新羅・古代・地域性

1. 研究開始当初の背景

近年、朝鮮半島における6～8世紀代（新羅による三国統一過程とそれ以後）の古代寺院や瓦窯などに関する遺跡報告、学会報告、研究会報告の出版は特にめざましい。これらと日本列島側の考古資料とを相互に比較することによって、当該時期の日朝交渉について様々な観点から改めて分析することが可能となりつつある。一方で、日本側に視点を移すと、韓国側の資料の蓄積によって、これまで単に朝鮮半島系とされてきた資料の中にも、より細かく新羅系、百済系、あるいは高句麗系とより細かく系譜を追うことのできる資料が増えていた。よって、逆に漠然と

「何々系」といわれた資料が、実はそれ以外の地域に類例を見出せる場合も少なくない。よって、今一度渡来系寺院の軒瓦を集成し、韓国側の最新資料と突き合わせることで、系譜関係を再整理する必要と考えた。

2. 研究の目的

大きく二つの目的を設定する。

(1) 朝鮮半島の瓦資料の集成、分析

新羅中央の慶州、百済や高句麗との接境地域の慶尚道北部や忠北地域、そして新羅資料と対比する形で百済中央たる公州・扶余・益山地域の主要古代寺院・山城出土の軒瓦資料を網羅的に集成し基礎資料を作成する。その

際、紋様や製作技法の析から地域性を明らかにしていきたい。次に現地踏査によって、特に慶州における各古代寺院の同範関係を探り、慶州地域内の瓦の生産・供給関係の一端を具体化してみたい。特に、すでに調査報告書が刊行されている、月城、新羅王宮遺跡、禁皇寺、皇龍寺、感恩寺などについて重点的に調査を行い、同範関係を追究する。

(2) 日本の渡来系寺院の軒瓦資料を集成する。今回は近畿地域を対象とする。その中で、紋様や製作技法の比較から、系譜関係を再整理する。例えば、図に示したように古代寺院には「米」字形の紋様の中房や軒平瓦の文様の軒瓦を用いる例が、いくつかあるが、これは実は新羅の軒丸瓦の中房や鬼瓦の周縁によく用いられる文様であり、新羅との関係がうかがわれる。日本で出土する例も、檜原廃寺(図1-1)や飛鳥寺(2)、近江華寺遺跡(3湖東式も出土)など、渡来人との関わりを考察することができる遺跡である。このような事例はこれまであまり注目されていない。他にも新羅資料と対比することで見出せる関連性を諸々積み重ねることで、敵対関係のみが強調されがちな、倭、日本と新羅の人的な交流を瓦を通して復元していきたい。そのことによって、文献史学において検討が続く統一新羅と日本との政治経済的交渉の礎が、三国統一以前の日朝交渉にあったことを明らかにしていく。

そのことによって、6～8世紀代を中心とした日羅交渉の展開過程を考古学的に浮き彫りにしたい。

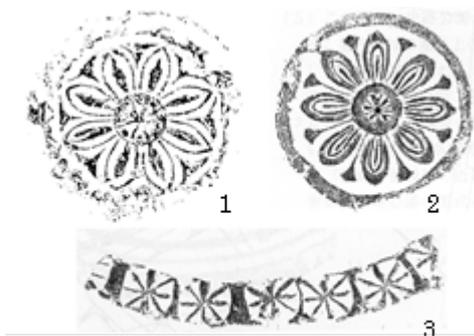


図1 「米」「※」文様の軒瓦

3. 研究の方法

6～8世紀における日朝交渉の動態について瓦を通して明らかにするために、3ヶ年をかけて、当該期の近畿地域の古代寺院、韓国の慶州、慶尚道北部、忠北地域、そして公州・扶余・益山地域の主要古代寺院・山城出土の軒瓦資料を網羅的に集成しデータ化作業を実施する。また、韓国や日本の各地域へ

資料調査に赴き、資料の詳細な観察を通して、その編年、系譜、地域性を整理する。特に韓国資料については同範関係に重点を置いて資料調査を行う。日韓両地域の資料集成の後、両者に紋様の、製作技術的に相関性が認められる資料を抽出し、その関係を具体化させることで、日朝交渉を具体化させる。

平成21年度

現在までに報告されている韓国の慶州、慶尚道北部、忠北地域、そして公州・扶余・益山地域の主要古代寺院・山城出土の軒瓦資料を網羅的に集成する。

また、大韓民国に赴き資料調査を重ねることも肝要となる。特に新羅中央たる慶州地域における数次の資料調査を行い、寺院ごとの同範関係などについての見識を深める。さらに、韓国側の研究成果を参考にしつつ、新羅の造瓦体制の一端について迫る。

平成22年度

現在までに報告されている、日本列島近畿地域とその周辺で確認された、渡来系寺院の軒瓦(創建段階を中心に)を抽出し、データベースを作成する。その際、先学の成果も参考にしつつ、資料収集に努めたい(註1)。また、平成22年度で網羅しきれない可能性のある韓国公州・扶余・益山地域の軒瓦資料の収集につとめる。そして日韓両地域の資料を集成する中で、相関性が認められる資料群を抽出し、その紋様の、製作技法的な関係を具体化させていく。それによって、次年度に行う、本格的な交流関係の検討に備える。これもまた、大韓民国並びに近畿圏に赴き資料調査を重ねることが肝要となる。本年度は前年度に得た知見に基づいて、日本側資料分析に役立てていきたい。単に、資料を収集するのではなく、分析を並行させて行う予定である。

平成23年度

前年度までに抽出したデータ、先行研究に基づき、日本列島と朝鮮半島、特に新羅の交渉内容を具体化していく。そのためには、編年、分布、系譜をそれぞれの資料に関して検討して行くことを目指す。また、前年度までに資料調査が不足した地域に重点的に資料調査に赴く。さらには、文献史学との総合化を目指すため、これまでの文献史学側の成果を熟知する必要がある。必要な論考を批判的に熟読、検討し、それと考古学的成果の総合化を行う。具体的には、文献には記録されにくい、より日常的な交流が考古学的にどのように認められるのかについて検討を加えることにする。それによって、当該期の日朝交渉の内容を具体化する。成果については、学会、研究会での研究報告発表、論文投稿を行い、さらに印刷物として刊行を目指す。

4. 研究成果

3の研究の方法にのっとり、日朝の瓦資料

を進めつつ、7世紀に日本（倭）が新羅との活発な交渉を通して先進文化や諸制度を摂取した状況を考古学的な観点から検討していった。その際に、宇治市隼上り瓦窯跡4号窯に伴う軒丸瓦（A・E型式）について、特に注目した。新羅から渡ってきた異なる技術伝統を有する二組の工人達によって製作された可能性が高いと考え、研究を進めていった。

また、飛鳥寺禅院の所用軒丸瓦についても、それぞれ独自性が高く、系譜をたどると新羅、百済、そして中国南朝に系譜が追え、相対的に新羅の要素が色濃く認められた。

さらには、本薬師寺と慶州四天王寺の双塔式伽藍の類似性について、注目しつつ、瓦についても裳階用瓦という観点からの検討を進めた。

そのような具体的事例に注目して7世紀の瓦資料からみると、日本（倭）と新羅は継続的に7世紀を通して交流を重ねていたことがうかがえる。その背景として、朝鮮三国の抗争の中で、折を見て倭との提携を模索する新羅の姿を認めることは許されよう。以下、その成果の要旨についてまとめる。

天智8年（669）の遣唐使派遣以降、大宝2年（702）に至るまでの30年間あまり、遣唐使は一度も派遣されていない。その間、日本（倭）が新羅との活発な交渉を通して先進文化や諸制度を摂取した状況が古代史学の側で指摘されている。7世紀における日羅関係の動態を考古学的な観点から検討していく必要もある。その予察として、飛鳥・藤原地域の寺院出土瓦をいくつか取り上げ、その系譜関係を追究することで、当時の日羅関係の一端を浮き彫りにしたい。

宇治市隼上り瓦窯跡4号窯に伴う軒丸瓦は飛鳥の豊浦寺に供給される。これまでA型式は「高句麗系」、E型式は「百済系」と考えられてきた。ただ、それぞれの製作技法の差異性と共通性、そして朝鮮半島における類例を検討すると、むしろ新羅から渡ってきた異なる技術伝統を有する二組の工人達によって製作された可能性も考えられる。

白雉4年（653）5月に学問僧として唐への留学を果たした道昭は、帰国後に飛鳥寺の東南隅に禅院を建てる。その所用軒丸瓦（5つの型式）はそれぞれ独自性が高く、系譜をたどると新羅、百済、そして中国南朝に系譜が追え、相対的に新羅の要素が色濃く認められる。また丸瓦部に朝鮮半島系の竹状模骨丸瓦を用いている点も特徴的である。

近年、慶州四天王寺の発掘調査が進展している。その成果と本薬師寺の調査成果を比較すると、双塔式伽藍配置という共通性のみならず、裳階、または裳階用軒瓦に関する共通点も垣間見える。

7世紀の瓦資料からみると、日本（倭）と

新羅は継続的に7世紀を通して交流を重ねていたことがうかがえる。その背景として、朝鮮三国の抗争の中で、折を見て倭との提携を模索する新羅の姿を認めることは許されよう。日本における律令国家の成立・展開において、新羅との交流ルートも一つの基軸であったと推定できる。

以上のような論を展開する前提として、日朝の瓦資料の集成、実物資料の調査を行った。また、今回は直接的に成果を反映させることはできなかったが、慶州地域で新たに確認された花川里瓦窯などの踏査や、を実施した。そして、新羅の地方の古代寺院の瓦資料の調査も行った。

国内では、国立歴史民俗博物館に所蔵されている瓦コレクションのうち、紀伊上野廃寺出土軒瓦に注目し、新羅の瓦製作技法との関わりを検討した。以前より指摘されていたことではあるが、新羅に特有な「包み込み技法」によって軒平瓦が製作されていることを再確認し、直接的な系譜関係が可能であると判断した。紀伊上野廃寺が双塔式の伽藍配置である点も新羅との関係をうかがわせるものである。この点で、本研究において最も主体的にあつかった、同じく双頭式伽藍配置をとる本薬師寺と慶州四天王寺との関係を傍証する資料として評価できるであろう。

これまで、瓦製作をはじめとする寺院造営に関わる様々な技術、情報については、飛鳥寺造営の経緯から百済との関係が強調されてきた側面は否定できない。しかし、それとともに、7世紀に日本（倭）が新羅からも様々な情報を瓦摂取していた状況が明らかとなった。その背景として、朝鮮三国の抗争の中で、折を見て倭との提携を模索する新羅の姿を認めることは許されよう。

また、瓦研究における成果を古墳時代における日朝関係と絡めて研究史的整理を行った。

以上の点を明らかにしたところに本研究の成果があると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①高田貫太2012「古墳時代の日朝関係史と国家形成論をめぐる考古学的整理」『国立歴史民俗博物館研究報告』170集 査読有

②高田貫太2012「瓦からみた日羅関係についての予察」『国立歴史民俗博物館研究報告』167集 査読有

③高田貫太2010「瓦からみた7世紀の日羅関係（予察）」『考古学論考』慶北大学校 30周

年紀念論叢（原文は韓国語） 査読なし
④高田貫太2009「本薬師寺の創建軒瓦」『古代瓦研究』V 奈良文化財研究所 査読なし

〔学会発表〕（計2件）

①2012年7月11日

高田貫太「瓦からみた日本と新羅の関係」
考古学研究会第26回東京例会

②2010年6月12日

高田貫太「古代における日本と新羅の関係」
奈良文化財研究所公開講演会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 貫太 (TAKATA Kanta)

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

研究者番号：60379815